

地理教育における野外学習の意義 —地理的意識育成の観点から—

美 誉 志 洋 子*

1. はじめに

地理教育の目的は地域や地域に見られる様々な事象を学習の対象とし、これらに対する理解を深めたり、見方や考え方を身につける点にある。このような目的に対し、野外学習は極めて有効な方法であることは多くの先行研究の指摘するところである。しかし実際についてみると野外学習の実施には制約が多いため、学校によってその取り組み方は様々であり、目的・内容・方法に一貫性が欠けていたり、小・中・高等学校の野外学習の体系化がなされていなかったりする例もある¹⁾。日常の学習は知識の記憶偏重に傾きがちで、地理的見方や考え方²⁾の育成にまで及ばないのが実情である。そのことは学習活動の様々な場面にあらわれており、例えば生徒の書いた旅行のレポート等を見ても、平素の学習による地理的意識³⁾の高まりはあまり見られず、学習の成果が身につけていないことを表わすものが多い。また野外学習の意義^{4) 5)}、野外学習の実践⁶⁾などについて研究した事例を見ると、具体的な学習内容と地理的意識の育成との関連でその成果を究明したものは見当らない。野外学習の意義を明らかにするには、具体的な学習を通してその成果を明確にする必要がある。生徒の地理的意識の高まりは、地域や事象に対して生徒が興味を持ち自分との関わりでそれらの持つ意味を理解し、その理解に必要な見方や考え方を身につけることによって促進されるものと考えられる。本研究はこのような観点から生徒に実際に野外学習を行わせ、学習前・後で個々の生徒の地理的意識がどう高まったかを分析し、これによって野外学習の意義について実証しようとするものである。

2. 研究の手順および方法

(1) 研究の手順

研究は次の手順で行った。

- ① 学習前に生徒を対象に、学習する地域の具体的な事象や景観についての地理的な意識の予備調査を行った。具体的には地域の景観を観察し、それについての観察文を書かせた。
- ② 学習したいテーマを決め、テーマごとに班をつくり、それを単位として学習させた。
- ③ 学習後、①と同じ方法で個々の生徒の地理的意識調査を行った。
- ④ 地理的意識をいくつかの要素にわけ、さらにそれに低次から高次の段階を設けて、その基準に照らして生徒が書いた観察文を分析した。
- ⑤ 分析結果を学習前・後で比較し、地理的意識の変化を捉え、そのことから野外学習の意義を考察した。

(2) 研究方法

野外学習実施にあたって次の地域を対象にその観察内容について学習指導を行った。

*茗溪学園中学・高等学校

① 野外学習の実施について

a. 対象地域とその特色

対象地域はつくば研究学園都市最南端に位置し、生徒の所属校とは県道を隔て南に隣接する赤塚集落⁷⁾の一部である。現在122戸のこの村の歴史は古墳時代にまでさかのぼることができ、集落の形態はつくば市域で最も一般的に見られる塊村で、近世に入ってから発達をみた新田集落の列状村とは対照的である。筑波稲敷台地上の南端部にあたるため地下水位は低く、年間の降水量も比較的少ないことから村の南を小野川とその支流が流れているにもかかわらず、昭和13年の土浦用水完成まで常に干害に悩まされてきた。古くから農業を基本的産業とするこの地域の人々は低地の水田における稲作と台地の畑作及び林地の利用をくみあわせて、他の洪積台地と共通した生活様式を長い間維持してきたと考えられるが、そのくみあわせかたや畑の利用はその時々々の社会条件を受けて様々に変化してきた。最近の大都市近郊の農村に共通した傾向としての地価の高騰、都市化にともなう就業機会増大につれての兼業農家の増加はここでも著しい⁸⁾。つくば研究学園都市の建設は学園地区に隣接するこの地域ではとりわけ上述の傾向を促進させ、農業後継者問題は深刻なものとなっている。このことは土地利用にも明瞭に表われ、畑や芝や栗などの粗放的利用が多く荒れ畑も見られる。さらに村内の伝統的農村景観とは異質の景観がいくつか認められる。一つは清掃会社の清掃車・バキュームカーの駐車場であり、もう一つは村はずれの新興住宅団地の存在である。どちらもかつて代官職にあった旧家の歴史と深く関わりながら研究学園都市の建設にともなって発展してきたものであるが、清掃会社のほうは土浦市の保健衛生施設の機能を、団地のほうは東京のベットタウンとしての機能をになっている。この村を観察し調査することによって、自然条件、社会的条件が密接に関係しあって赤塚の特色をつくっていることや、この地域の特色の一つは他地域との関わりから生じていること、一つの条件が変化することによって地域そのものが変容していく様子を学ぶことができる。

b. 野外学習実施の方法

野外学習では、具体的な事象をとおして学ばせることによって赤塚の特色や地域の変容などの地理的意味を理解させ、その結果生徒にとって身近な赤塚地区について興味や関心を高めることを目的とした。対象者は中学校第2学年の男女22名であった。学習内容は全体のテーマを「赤塚はどのような所か」とし、さらに ①「赤塚の自然と植生」②「赤塚の耕地利用」③「なぜ赤塚にバキュームカー・清掃車があるのだろうか」④「赤塚の伝統的なもの」⑤「東宝ランド（新興住宅団地）はなぜできた」というテーマ別の5班にわかれて学習した。いずれのテーマについても分布的、関係的、地域的に見たり考えたりすることによって地域の特色や変容は捉えられ、地理的意識を高めることができると考えられる。最後に各班の発表を行い、話し合いとまとめの時間を設けて地域の全体的な把握および地域の特色と変容がより明確に捉えられるようにした。学習時間は主として夏休みを利用して14～17時間で、このうち校外での観察・聞き取り等の調査は7～10時間であった。

② 地理的意識調査の内容・方法

地理的意識の調査は野外学習の前・後に同じ条件で臨地調査法⁹⁾を用いた。それは観察させ観察したことを作文に書かせるもので、ここでは赤塚地区のなかに七つの観察地点を定め、これらを約1時間観察させ、地点ごとに印象や気付いたこと、赤塚らしいと思ったこと等を短い文章で表現させた。生徒はそれぞれそのとき身につけている地理的意識に応じてそこに見られる様々な事象のなかから特定のものを見出し、その意味を考え言葉で表現する。各地点の主な観察内容と地理的意識の基準(後述③)との関係は次のとおりである。研究学園都市と赤塚の境界にあたる農道上で、地域的まとまりが明瞭なア地点では〔対比・地域的まとまり〕、部分的な平地林と広大な芝地の広がるイ地点では〔地域の変容〕、伝統的な農家と様々なタイプの家が密集した新興住宅団地の見えるウ地点では〔地域的まとまり・地域の変容〕、防風林がみごとな農家の並ぶエ地点では〔関係〕、多数の清掃車やバキュームカーと旧家の長屋門の見えるオ地点では〔地域の特色・変容〕台地と低地の境界にあたる農道上で、作物のさまざまな種類や水田の間に存在する畑が見えるカ地点では〔比較・因果関係〕、小野川の低地全体が望める台地末端の農道上で、川をはさんで両側の河岸段丘と低地との土地利用の違いが見えるキ地点では〔分布状態・相関関係〕を主要な観察内容とした。

③ 地理的意識の分析基準と観察文の分析

a. 地理的意識の分析基準

観察文をもとに意識を分析するには一定の基準が必要である。地理的意識については様々な要素があるが、それらは地理的見方や考え方や密接に関係しており、地理的見方や考え方を高めることによって地理的意識もまた高まるものである。地理的見方や考え方の一例は学習指導要領の地理的分野の目標にも示されている。地理的意識は生徒の成長や学習などによって次第に高まり、それが学習への興味や関心へと発展するものと考えられる。一般に地理的意識は具体的なものから抽象的なものへ、単純なものから複雑なものへと高まるが、それを地理的事象の把握のしかたによる低次から高次への段階と考えると、地理的事象を個体として把握する段階、個体を数量的に把握する段階、地理的事象を動的・発展的に捉えたり地理的事象を成立させている原因や意味内容を把握したりする関係的把握の段階、さらに地域的広がりの中で捉えようとする地域的把握の段階へすすむ¹⁰⁾。本稿では、これらのことをもとに地理的意識の分析基準を表1のように設定した¹¹⁾。すなわち、地理的意識をA～Fの六つの要素にわけ、さらにA・Bには、事象の捉え方によってそれぞれ段階を設けた。要素A～Fとは、A：対象空間の区分の仕方、B：選んだ対象の組み立て方と意味付け方、C：興味と関心の方向、D：地理用語の使用(興味・知識・概念)、E：地名の使用(関心・知識・地域的概念)、F：問題意識の表わ(興味・関心)のことである。A・Bにおける段階とは、Aの要素については1個体的、2線および面的の2段階の把握、Bの要素については1個体的、2数量的、3分布的、4関係的①、4関係的②、5地域的①、5地域的②の七段階の把握のことで、数字が大きくなるにしたがって意識の段階が高い状態を示している。

表1 地理的意識の分析基準 …上山(1972)朝倉(1968)を基に作成

		実際の文章には次のように対応させた
A 対象空間の区分の仕方		(例) 赤塚側は畑が多く、開発が進んでいない
1 個体(点)的把握	E B3b Cd B2	B4②d
2 線的・面的把握		B4②b
B 選んだ対象の意味付け方・組み立て方(地理的意識の段階)		
1 個体的(個々に独立した存在として)		・木がある
2 数量的(個数や量として)		・家が多い
3 分布的(一定の広さをもった場所としての認識)		
a 絶対位置(方位など)		・北には山、南には川
b 相対位置(上下、左右など)		・家のとなりに畑がある
c 立地状態		・山と平野の間に町がひろけている
d 分布状態		・台地の上に住宅が密集している
e 形状(大きさ・色・形)		
f 高低		
4 関係的把握 事象の関係を考える		
① a 対比(具体的な事象の比較)		・道のこちら側と反対側では
b 時間的变化(動的、発展的)		・だんだん家が建ちはじめた
② a 相関関係(相互の関係)		・家の形から見ると農家らしい
b 因果関係(原因と結果の関係)		・交通量が多いのでスモッグが発生する
c 比較(抽象的な事象、他地域との比較)		・東京に比べて住宅が点々と…
d 概念(特に抽象的な意味をもたせている)		・開発がすすんでいる
5 地域的把握 …文章全体で表現される場合が多いためここでは例を省く		
① a 地域的まとまり(共通性、統一性などその場所としてのまとまり)		
b 他地域との比較(地域相互の比較、関連)		・赤塚に比べ原新田は
② a 地域的特色(地域個々の性質、その地域らしさ)		
b 地域の変容(他地域との関りや地域を構成する事象および事象相互の関連によって変化する地域的特色)		
C 興味と関心の方向(選ばれた対象の内容)		
a. 自然に関する	b. 居住の様式・集落の形態に関する	c. 人口に関する
d. 土地利用に関する	e. 生産活動に関する	f. 交通に関する
g. 環境に関する		
D 地理用語(興味・知識・概念のあらわれ)の使用		・防風林、都市化
E 地名(関心・知識・地域的概念のあらわれ)の使用		
F 問題意識(興味・関心・地域的把握・共感的理解)の表われ		

b. 観察文の分析について

学習前・後の意識調査で生徒に書かせた観察文と上記の分析基準を資料1のように対応させ、この結果を表2にまとめ、これをもとに図1～3を作成した。生徒の意識の変化を捉えるにあたっては、これらの図のほか観察文、感想文、野外学習の発表会に生徒が作成した資料なども用いた。これら資料作成の対象生徒としては、野外学習のすべての過程を経験し、なお観察文の記述内容が共通しているもの6人(3テーマについて各2人ずつ)を抽出した。

資料1 学習前・後のアの地点の観察文と分析の実際(S子の例)

前 A2 学校側には新しい住宅地で、赤塚側は畑が多く、開発が進んでいない。
 後 A2 カメラのきむら側は建物の間に植木(つつじ)が定期的に植えられ、学園都市らしい。赤塚側はもとのやまの木が残り、やまを切り開いてつくった畑があつて赤塚らしい。

Handwritten annotations include: B4①a 対比, B4②b 因果, B5①a 対比, B5②b 因果, B4①b, B4②a, B5①b, B5②a, B3c, B3b, B2, B3d, B4, B5, B4①b, B5①a, B4①b, B5①a.

表2 観察文の言葉や表現に見られる地理的意識

M男について

(対象空間の区分の仕方)

意識の要素	A		B (選んだ対象の意味づけ方・組み立て方)					C (興味と関心の方向)		D (地理用語)	E (地名)	F (用途・用途)		
	1	2	1 個体的把握	2 数量的把握	3 分布的把握	4 関係的把握		5 地域的						
意識の段階	個体的	量的・面的			a 絶対的把握 b 相対的把握 c 分布的把握 d 形状	a 対比的 b 時間的 c 空間的	a 相因比較 b 因果概念 c 比較	a 地域的把握 b 地域比較 c 地域関係	a 地域的把握 b 地域特色	a 自然環境に利用する b 地形・人口・交通環境				
観察地点	ア	ア			b (2)	a	d a			d				
	ア	ア			d c b (2)	b	d a (2)	b		d (2) b a				+ (3)

+は言葉や表現が見られたことを示す。括弧内はその回数を示す。

3. 調査の結果と考察

野外学習前・後における各生徒の地理的意識の変化は、図1に示した。それは全観察文中にあった地理的意識を示す言葉の総数(全円)に対し、意識の要素Bの七つの段階(個体的把握から地域的把握まで)に対応するものの相対比を、学習前・後で比較したものである。これによって全員、H男のいずれの場合についても次の二つのことがいえる。

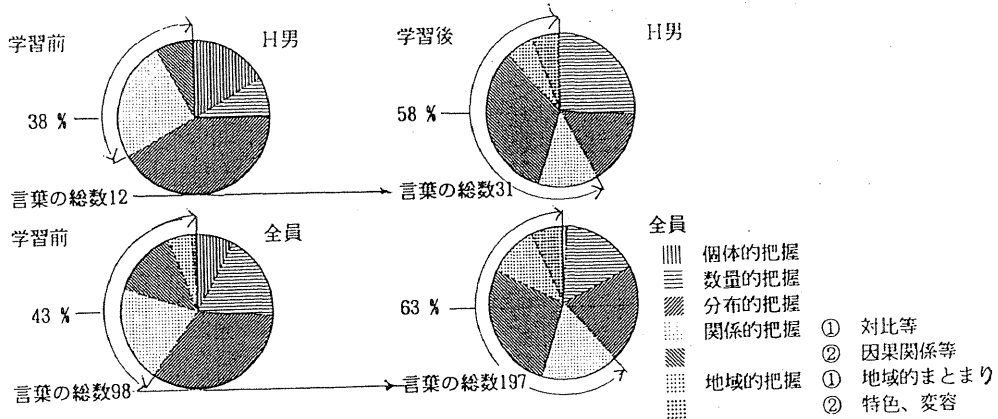
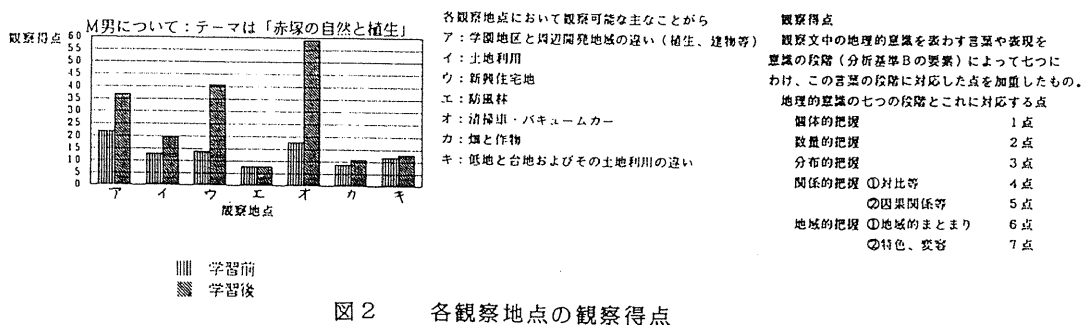


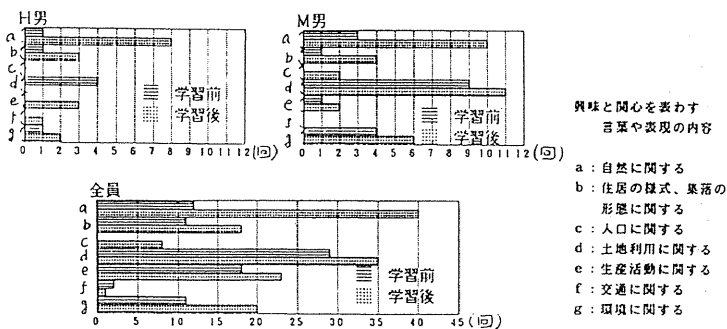
図1 野外学習前・後の地理的意識の変化

- ① 学習後には、地理的意識を示す言葉や表現の総数が増加している。それは生徒が事象を多面的・多角的・複雑な関係で捉えることができるようになったためと考えられる。
- ② 地域的把握のような高度な把握¹²⁾の仕方を示す言葉や表現の割合が著しく増加している。それは学習後には抽象的な意味内容が捉えられるようになったことを示すものであり、地理的意識の段階が高くなった、換言すれば地理的意識が育成されたと考えられる。

学習前・後における各生徒の観察地点の見方の変化は、図2に示した。これは観察地点7箇所(ア～キ)について観察得点をつけ、それを学習前・後で比較したものである。それぞれの地点における観察得点は、地点の記述に見られる地理的意識を表わす言葉を、分析基準の要素Bの七つの段階に対応させ、それぞれの言葉ごとに段階に応じた点数(1～7点)を加算していったものである。得点は文中の言葉の意識の段階が高いほど、また、数が多くなるほど高くなる。M男についてみると、自身で選んだテーマ「赤塚の自然と植生」に関係の深い観察事象(エ防風林)より、テーマに直接関係のない観察事象(ウ新興住宅地、オ清掃車・バキュームカー)に著しい変化が見られた。これは他の生徒においても同様であった。このことは、自身で選択したテーマの学習によって身につけた見方や考え方は、テーマ以外のいろいろな事象を見る際に活かされていることを示していると考えられる。



野外学習前・後における生徒の興味や関心の変化を図3に示した。それは、各生徒の観察文全体に見られる地理的意識を表わす言葉や表現を内容によってa～gに分類し、その数を示したものである。このことから次の三つのことが明らかになった。



- ① 同じテーマ、例えば「赤塚の自然と植生」を学習した二人に共通のこととして、学習後にはテーマに関係の深い内容（この場合はa自然に関する内容）の言葉は多くなり、テーマと関係の少ないものについてはそのような関係ははっきりしない。このことは他のテーマ学習者にもあてはまることから、野外学習によって、自分自身の学習テーマに関する事象への関心や興味は高まると考えられる。一方、H男のdのように内容によっては学習前よりむしろ表現は減少しているものも見られた。これは地理的意識が高まった結果、包括的に、あるいは抽象的に表現できるようになったため言葉が省略されたものである¹³⁾。
- ② 全員についてみると、テーマについての興味や関心のばらつきが見られるものの、全体的には学習後の数は増加しており興味や関心の高まりを見ることができる。
- ③ cの人口、fの交通に関する内容についてはいずれも少数であった。それはこの地域が農村であるため、具体的に見えにくいこれらの事象は生徒の関心を引きにくかったものと考えられる。cについては宅地化と人口増加とを関連づけるなど、適当なヒントを与えると関心が高まることがわかった。

資料は掲げていないが、学習前・後における全生徒の地理用語（意識の要素D：興味・知識・概念）や地名（意識の要素E：関心・知識・地域的概念）の使用総数の変化を見ると、前者は3倍、後者は10倍に増加していた。これは生徒の興味や関心の高まりと同時に新しい知識の獲得や概念が形成されたことを表わし、さらに体験を通して得られた知識や概念はそれ以後意識的に用いられるようになってくることを示している。

また学習前・後における各生徒の問題意識（意識の要素F）の変化については資料2の観察文の抜粋を示した。生徒が問題意識をもって事象を捉えることは、高度の地域的把握ができることを示すものであり、興味や関心の表われでもあり同時に自分との関わりで捉えようとする共感的理解の表われでもありと考えられる。N男についてみると、学習前の表面的・具体的な捉え方から科学的・抽象的な捉え方へ、さらに自分をふくめた地域社会の問題としての捉え方に変化しているのがわかる。そしてこのような捉え方は自分で選んだテーマに関する事象ばかりでなく、他の事象についてもそのような捉え方をするようになっており、N男以外の生徒についても同様であることがわかった。

資料2 N男の観察文に見られる問題意識の変化（学習テーマ「赤塚の耕地利用」）

観察地点イにおいて「（芝ばかりで）畑が少ない」という表現が「これから畑になると思う、理由は…」という表現に変わった
 観察地点カにおいて「ネギ、ウド…がある」という表現が「人手が足りず、大変だということがあった。牛久でも同じだと思った。」という表現に変わった。

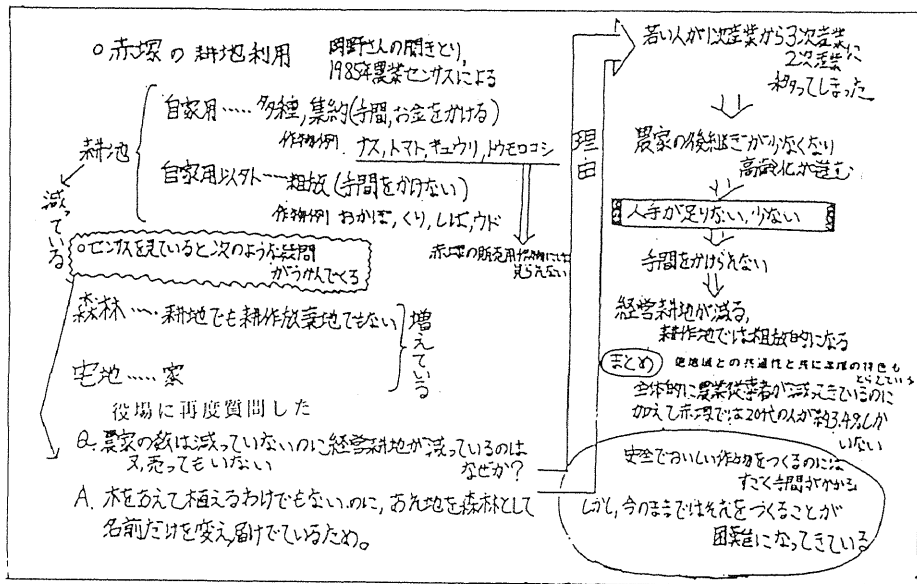
学習前・後の生徒自身の意識の変化（自己評価）については資料3の感想文に示した。それによると、全員が以前とは事象の見方や考え方が変わったこと、事象のもつ意味が見えてくることのおもしろさなど自己の意識の変化に気づき、主体的にものを考える学習の楽しさを表現していると思われる。

資料3 S男・K子の感想文に見られる地理的意識

・S男…学習テーマ「赤塚の耕地利用」
 「なにかあるときはたいてい理由があって、その何かについてもっと知ることが大切だとおもった。例えば岡野さんの話から、うねのたてかたでも畑の広さや向き、作物の種類から決まるし、なんでもない木が守り神様だったりするので人の話を良く聞き、理解することが必要だと思った。」
 ・K子…学習テーマ「なぜ赤塚にバキュームカー、清掃車があるのだろう」
 「いろいろ見方が変わっていったことは自分にとって収穫でした。バキュームカーについては見方がたまたまない、くさいというばくぜんとしたものでなくて自分達の生活になくてはならないもの、あんな処理場へ運んでいるんだという感じかたになりました。」

地理的意識の高まってゆく過程については、資料4の野外学習発表時にN男が作成した資料から推察することができる。体験的に蓄積していった知識を関連させてN男が事象を理解していく過程、さらに多面的な考察や調査活動をへて見方や考え方を身につけ問題意識をもつようになる過程が明確に表われている。

資料4 N男の考えの模式図



4. まとめ — 地理的意識の育成から見た野外学習の意義 —

以上、野外学習の体験の結果の分析から、次のことが実証できた。

- ① 学習の結果事象を多面的に捉え、複雑に関連づけたりより、高度で抽象的な意味内容を捉えるようになってきていること。

- ② 身につけた見方や考え方がいろいろな事象をみる場合に生かされていること。
- ③ 学習内容に関する興味や関心が高まっていること。
- ④ 体験を通して得られた知識や概念は活用する傾向があること。
- ⑤ 事象を自分との関わりから捉えるようになってきていること。
- ⑥ 地理的意識が高まっていることを生徒自身が感じ、また主体的な学習を喜んでいること。

野外学習の特質は、一般に直接観察や調査ができ、生徒の体験や意識と結びつきやすいこと、具体的な事象を対象に興味や関心を持ち、実感をもって多面的に考えられること、彼ら自身の問題意識による自主的な学習ができることである¹⁾。本研究においてもこれまで見てきたように、生徒の意識の変化の一つ一つが彼らの学習してきた過程における直接観察や体験等野外学習の特質に密接に関係していることがわかった。また、生徒が今まで何気なく見過していた事象も、それぞれ意味のあるものとして見えてくるおもしろさによって、学習への興味や関心が促されていることがわかった。野外学習をくりかえすことによって身についた地理的な見方や考え方は、地域やそこにおける事象を見るときには常に生かされるものであり、このことは野外学習が単に地理的意識育成に役立つばかりでなく、日常の学習において他地域を学習する際にも生きてくると考えられる。これらのことから野外学習は地理教育に大きな意義をもつものと考えられる。

謝辞

稿を終えるにあたり、終始御懇篤な御指導を賜りました篠原昭雄教授に心からお礼申し上げます。また本研究に御協力いただいた修士課程のみなさんおよび茗溪学園の生徒の皆さんに深く感謝いたします。

注

- 1) 小澤一郎(1982)「野外調査の重要性」『地理』27-2, p37～43
- 2) 文部省(1989) 地理的分野の目標(2)(3)(4)「中学校学習指導要領」
- 3) 朝倉隆太郎(1968)「地理的意識の発達と地理教育」『講座 社会科地理教育・地理教育の理論と技術』明治図書 p 102～129
- 4) 篠原昭雄・町田貞(1984)「地域学習の変遷と展開」『社会科地理教育講座2』明治図書 p 47～65
- 5) 朝倉隆太郎(1985)「地域学習の意義」『社会科教育と地域学習の構想』朝倉先生退官記念出版会 p 13～44
- 6) 寺本潔(1989)「浅井治平の地理教育論」『愛知教育大学研究報告』38, p13～25
- 7) 1987年つくば市に合併前の谷田部町大字赤塚。谷田部町については『谷田部の歴史』谷田部の歴史編纂委員会(1975)
- 8) 農林水産省「1985年世界農林業センサス・農業集落ロード」
- 9) 佐島群巳(1984)「地理的意識の研究と課題」『社会科地理教育講座2』p 7～16
- 10) 鳥海公(1987)「小・中学校一貫の地理教育-小学校中学年の地域学習と中学校諸地域学習を中心に-」『新地理』34-4, p 30～39
- 11) 上山英昭(1972)「地理的分野においておもに態度的能力を対象とした評価の実際」『地

理的分野の評価事例』明治図書 p 237 ～251

- 12) 一般に中学校段階で発達するとされる地理的意識の要素Bの4 関係的把握①から5 地域的把握②までをさす。
- 13) 前掲11) p 250
- 14) 篠原昭雄 (1983) 「地域教材活用の意義」『中学校社会科授業研究 1 地域教材を活用した地理的分野の授業』明治図書 p 7 ～21